

第7章 消費（1）

応用マクロ経済学 2



教員：奴田原 健悟

<http://www.kengonutahara.com/teaching>

第7章のアウトライン

第7章の授業でやること

- ① ケインズ型の消費関数
- ② 異時点間の消費選択

教科書との関係

- ▶ 「マンキューマクロ経済学Ⅱ（応用篇）」（東洋経済新報社）の第5章（5-1、5-2）

なぜ消費が重要か？

1. _____ を構成する要素

$$Y = C + I + G + NX$$

⇐ GDP の約 _____ 割が消費

2. 消費からこそ、人々は _____ を得る

- ▶ 経済学では、高い消費水準を実現することが重要

1. ケインズ型の 消費関数

ケインズの3つの推論 (1/2)

1. 限界消費性向 MPC は、 _____
 - ▶ 限界消費性向：可処分所得が追加的に1単位増えたときの消費の増加量
2. 可処分所得 Y が増加すると、平均消費性向 $APC = C/Y$ は _____ する
3. 可処分所得が消費決定に最も重要な変数である

⇒ すべて満たすのは「 _____ 」

$$C = \bar{C} + c \times Y$$

但し、 $\bar{C} > 0$ かつ $0 < c < 1$ (c が _____)

ケインズの3つの推論 (2/2)

ケインズ型消費関数

$$C = \bar{C} + c \times Y$$

ケインズ型消費関数が、推論 1 と推論 3 を満たすのは明らか

推論 2 : 平均消費性向を計算すると

$$\frac{C}{Y} = \frac{\bar{C} + c \times Y}{Y} = \frac{\bar{C}}{Y} + c$$

⇐ Y が大きくなると、 C/Y は _____

実証結果との関係

家計のクロスセクションデータと整合的 :

※クロスセクションデータ：時点を固定した下で、同種の集団に対して調査されたデータ

例：2018年の日本の各家計の所得と消費のデータセット

(データ結果1) 家計は可処分所得が増加すると

- ▶ 消費が増加： _____
- ▶ 貯蓄が増加： _____
- ▶ 貯蓄率が上昇： _____

(データ結果2) 可処分所得と消費は強い

⇐ 可処分所得が消費を決定するようにみえる

2. 異時点間の消費選択

フィッシャーと異時点間の消費選択 (1/2)

アービング・フィッシャー (1867-1947) :



消費者は のことも考えて

自身の の効用が最大になるように

現在と将来の消費を決定

フィッシャーと異時点間の消費選択 (2/2)

消費者は _____ の予算制約の下で
最適な消費配分を決定

- ▶ 異時点間の予算制約：現在と将来の消費に使える総予算の制約

← 第4章で扱った _____ も
フィッシャーの消費の考え方にもとづく

ケインズ vs. フィッシャー (1/2)

ケインズ :

- ▶ 現在の消費は、 _____ に依存して決まる

フィッシャー :

- ▶ 現在の消費は、 _____ で決まる
- ▶ 消費者は貯蓄や借入れが自由にでき、どの時点で所得を得るかの _____ は関係ない
 - ★ 消費したい量よりも所得が多いときは _____ を
少ないときは _____ を行う

ケインズ vs. フィッシャー (2/2)

ケインズとフィッシャーは全く異なる考え方のように見える

⇐ 本当にそうか？

もし _____ があった場合

- ▶ (フィッシャーが考えるように) 家計が将来のことを考えて現在の消費を決めているのに、(ケインズが考えるように) 今期の消費が今期の可処分所得で決まることもある